

沖

8
2020

共鳴雑誌【対話】



細身傘

能村 研三

ITによる連衆意識

他人と多く交わらない生活様式が推奨されて五か月が経とうとしている。顔を合わせて一堂に会する句会が懐かしく思えるようになってきた。本来人間は他人と交わり、その中で成長していくもので、俳句会においても土俵を一つにして他人の句に触れ合うことで刺激され、自らの創作意欲へと繋がってきた。今は一堂に会しての句会が出来ないのでその代わりに紙上句会を行っているが、なんとも淋しいものだ。

そもそも文化というものは一人で築けるものでなく、他人との交流があつてこそ、輝くものになるのである。茶道家の千玄室は「日本の生活文化、礼儀などは人と交わる事によつて学べるし豊かになる。相手がそこに居てこそ、その心を慮れるものである」と述べている。俳句もまた座の文学として興つた。「日本独特の文芸形式である俳諧の本質は、人の和をもつて始まり、それをもつて終わる」は尾形仿「座の文学」の名言である。

一方、先日歌舞伎の世界ではコロナ禍の逆境の中、最新技術を駆使して一部リモートによる歌舞伎が公演されるというニュースがあつた。四百年の歴史のある歌舞伎にとつては画期的なことである。生の迫力といったものは感じられないだろうが、劇場で体験できない大迫力の場面などの演出ができるという。「沖」でも長年の懸案であつたホームページが六月のはじめに開設された。私が考えた企画を長女的美緒が技術的にサポートしてくれた。ほぼ一か月で八百人近くの人が見て下さり、そのカウントで反響がよいことを喜んでいる。

また、同人の清水佑実子さんの発案でリモートによるZOOM懇談を始めた。岩手、富山、岐阜、静岡、九州など地方の方も参加いただき画面を通じて交流できることは楽しいことだ。

まだまだコロナ禍の感染が心配される昨今、こうしたITを活用した方法で連衆の意識を高めていければよいと思つている。

夏籠にして休肝の日としたり
半夏生使はぬものが捨てられぬ
定刻の鐘楼下の蟻地獄
細身傘持ちて父の日出掛けをり
段取りのとほり竹皮脱ぎはじむ
並びゐて日傘の幅の距離を置く
涼しかり料亭女将に書画の才
撰末社荒造りなる茅の輪かな
青時雨気随気儘な骨董屋
茅花野の風を待たせて乗り換す

能村 研三

かたつむり

森岡 正作

眼前に海見ゆ夏のぶつかり来
 雲来れば雲に乗りたるあめんぼう
 つんつんと人語に応ふ目高かな
 かたつむり愛の言葉は聞き洩らす
 紫陽花の毬みな宙に放ちたし
 羽抜鶏相手かまはず挑みをり
 甚平のまた担がるる発起人

真鍋呉夫編の『能村登四郎句集』という小冊子の中に、梅雨時の鯰を詠んだ〈魚籠の中無然と髭の梅雨鯰〉という句を見つけた。魚釣りが好きかどうかではなく、釣り人がいて側に魚籠などがあるとつい覗きたくなる。きつと先生も「釣れますか」などと言って、魚籠の中のどつてりした鯰を見たのである。

私は中学、高校生の頃よく鯰を釣った。二十センチ余りのものはそのまま、大きいのは輪切りにして醤油で煮た。獲れ過ぎて手の込んだ料理をする気力もなかったであろう。鯰鱗は切られて句になるが、鯰は大きく髭が立派であればよいのである。「梅雨鯰」と「梅雨」が付いて貫禄も出るが、図体の大きな顔に小さな目、飄々として愛らしくもある。先生の見た鯰は釣られたゆえにふて腐れ、無然たる表情になったであろう。

何しろ鯰は地震学者様である。食へ過ぎたことを反省し、今は、甚平を着た隣のおじさんと同じくらい親しく思うのである。


 飛鷹選評

能村 研三

芒種かな夜雨の音のやはらかき 宮下 桂子

「芒種」は先師登四郎の句集の題名になった季語で、二十四節気の一つ。芒のある穀物を播く時期から来たことばで、田植の時期に入つて、天候も梅雨のような状態になる。芒種の頃から農耕が始まり、農家が忙しくなってくる頃で、夏至が目前のこの時期には、恵みの雨が降り注ぎ、植物にとつては息をつける時である。梅雨に入ったばかりなので、大雨になるようなこととはなく、夜に降る雨の音も柔らかい。

帰省子の靴玄関に落ちつつかず 千葉 禮子

まだ故郷で暮らしていた頃は、一人の子供として玄関に靴が脱ぎ捨ててあつても気にならなかつたが、都会に出た子が夏休みみに久しぶりに故郷に戻つて来た時は、帰省子が履いてきた靴も都会的なセンスのあるもので、何となくよそよそしく感じた。ここでは帰省子の靴がテーマで詠まれているが、都会で暮らす子と親の時間が経過するに連れての成長ぶりが窺える。

塹壕は城の語部草茂る 宮岡 弘

テレビの大河ドラマの影響なのか、城のブームが続いている。中でも山城は日本で早くから造られた城で、名前の通り、険しい山などに築かれている。戦国の世に、敵の銃砲撃から身を守るために陣地の周りに掘られた穴や溝を設けた塹壕が、その歴史を物語っていた。

土管より覗く青空つくしんぼ 角口 秀子

子どもの頃の楽しい思い出の一シーンであろうか。昔は道の縁に工事を使う土管などが置かれていた。子どもの体が入るような土管を覗いてみるとその先には真つ青な青空が広がっていた。舗装がされていない道にはつくしんぼが生えていた。懐かしい景である。

万緑や比肩の友の書の力 関 妙子

「万緑」は、万の緑、見渡す限りの緑であるから、都会で見るとちまちました緑とは違つてスケールの大きさを感じる。強い力を感じさせる季語である。比肩とは同等の、匹敵する、相当するなどの意味であるが、ここで詠まれた比肩の友と言っても、作者ご本人の方が書では力があり、後輩にエールを送る意味でこのように詠まれたのだろう。

能村登四郎の軌跡〔24〕

能村 研三

朴咲けり不壊の宝珠の朴咲けり

『芒種』平9

「朴咲けり」のリフレインの句。意識した表現法というより自然に感激を吐露した詠みぶりと窺える。登四郎は「表現法に工夫をすれば、技巧というものは自然に生まれてくるもので、本當にうまい俳句はうまさが目立たないものであり、すぐれた技巧は一見無技巧を思わせる」と述べている。我が家のシンボルツリーの朴の木は高山支部の方から頂いた苗で、みるみる生長し今では二階を越えるほどになった。しかし何年もの間咲くことは無く、諦めかけたころ初めて花をつけてくれた。その時の感激は今でも忘れない。

霊地より天降るしだれざくらかな

『芒種』平9

平成九年四月、東吉野村の宝蔵寺の枝垂桜の方に句碑が建立された。この桜は奈良県でも最大級と言われ、樹高十メートル、最大周囲は三・六メートル。当地には神武天皇が鳥見山に霊時を設けたという伝説の史蹟があり、登四郎はそこを訪れた後、宝蔵寺でこの句を詠んだ。東吉野村が句碑の里づくりを推進し、茨木和生さんのご尽力により村を挙げての句碑開きとなった。開眼にあたり登四郎は〈花充ちて祝ぎの刻まつ句碑しづか〉を作っている。原案の句へしだれ枝の天降るごとき桜かなは句集『易水』に収められている。

楫やゆづるべき子のありてよき

『羽化』平10

平成九年十月「沖」同人研修会が箱根で開催され、その後登四郎に林翔先生と私と呼ばれ「来年から研三に沖作品選を任せたい。同人作品の選は林さんをお願いしたい」という話があった。八十代前半は健康にも恵まれ俳句の実作も旺盛に臨んでいた登四郎であったが、八十五歳を過ぎると今までのような無理が出来なくなり、最低限の仕事だけを残して他の仕事は徐々に整理をするようになった。「沖」には多くの先輩方もおられる中責任は重かったが、「沖」を後世に繋いでいくには私の役目も大事であると思ひ引き受けることにした。

ながらへて見る秋空の鮮しき

『羽化』平10

この句の前書には「句碑開きそして米寿祝賀」とある。平成九年の秋、市民が拠出するお金で、市民が選ぶ「市川市民文化賞」が制定され、その第一回目の賞が登四郎に授与された。この賞の仕掛け人は詩人の宗左近さんで、登四郎はこれまでに多くの全国規模の俳壇関係の受賞をしていたが、地元から榮譽ある賞をいただくことはこの他嬉しかったようだ。平成十年一月に米寿を迎えたことも重なったので、この賞金を活かし、市川市国府台のスポーツセンターの陸上競技場が見下ろせる丘に〈春ひとり槍投げて槍に歩み寄る〉の句碑が建立された。



蒼茫集



青茅の輪

吉田政江

楠若葉

楠原幹子

*鳥声の一度きりなり明易し
朝顔蒔く発芽の日付空けてあり
ひなげしや男言葉の可愛い子
茅花流し放牧牛の目を閉ぢて
青茅の輪残りの未来開きさう
蒲公英の絮吹いてゐる自愛かな

少年

宮内とし子

片膝

千田百里

全長を風が見せたる蛇の衣
せせらぎに和む安曇野花わさび
笹の香もうれし粽の紐長し
一隅に諦めぬ色余り苗
ぴつたりと折り目簞笥の白緋
*少年の喉元白しハンモック

多佳子忌の夏の怒濤に足濡らす
蟄居してこころの糧の朴の花
*桜桃忌片膝立てて酒を酌み
風五月押つ取りパジャマの夫が来る
入院三旬
バードウイーク病室名主のはなし好き
長き長き病廊寝ねず薄暑光

我慢の限界

辻美奈子

*我慢の限界カサブランカの蕾
カサブランカ夜明のごとくひらきけり
たつぷりの眠りのあとの百合真白
咲ききつて百合を汚しぬ百合の蕊
新樹みな葉裏に気孔ひしめかす
ブラックホール茫洋とひた涼し

鋼のほひ

能美昌二郎

萩焼に切込みひとつ若葉光
裕次郎の駆けたる浜や夏来たる
神体は沖の島なり青葉潮
*刃物屋の鋼のほひ新樹光
黎明の杜馥郁と朴の花
麦秋や腰布だけの磔刑像

風のまほらま

大沢美智子

校庭は風のまほらま五月鯉
駅前フィットネスジム走り梅雨

待合室は小さき文庫柿若葉

夜の新樹葉騒しづかにありにけり
*弓なりの水緊緊と築を打つ
藻畳にわれもをるぞと蟾蜍
夏草は
林昭太郎

都庁舎の百千の窓風ひかる
麦秋や泣き足りて兎の深眠り
オルガンのぶうかぶうかと梅雨に入る
飽きられて草笛草に戻りけり
手にすれば曇るフルート青葉冷
*夏草は男の匂ひ刈り伏せる

火花

藤森すみれ

身の中は草の踏みあと岩清水
*石打つて火花生む鋤耕せり
新緑や白樺の白燃ゆるかに
藤の花真下の椅子に眠りたし
刃切れよき水音と暮らす夕端居
朱の橋はわが家なりけり蛭来よ

潮鳴集



自愛の色

安藤しおん

蕝草の香に励まさる庭箒
船底の滄波む夏へ夏へ汲む
*紫蘇揉んで自愛の色を濃くしたり
類想を赦しメロンは網に入る
泡ひとつずつと自粛の水中花

朴の香

七田文子

*溶け出づる朴の香みちのくの闇に
酒蔵に発酵の音梅雨の闇
パリー祭愛よ恋よと歌ひもし
生身魂煙れるやうに座してをり
出会ひと別れ見つむロビーの花氷

鯉飯

阿部眞佐朗

はつ夏や碧を湛へる仁淀川
水切りの川面の綺羅や子供の日
早朝の採血台にカーネーション
*巢籠りや男の作る鯉飯
忠臣蔵外伝を読む単衣かな

テレワーク

町山公孝

テレワークのカメラ隠してさくらんぼ
マンホールは路上のコイン梅雨晴間
やはらかく包む乳房や藍浴衣
素裸の孫追ひかけるバスタオル
*強がりの裏の寂しさ黒百合は

沖作品



能村研三選

能登瓦朝日はじけて今日立夏

市川市

宮下 桂子

雨あらふ新緑さらに鮮やかや
茅葺きの家を沈めて柿若葉
無聊なる家居今宵は豆御飯

*芒種かな夜雨の音のやはらかき
薫風や手の平にのせ切る豆腐

青森

千葉 禮子

夏の蝶津軽富士より去り難し
*婦省子の靴玄関に落ちつかず
淋しきや佞武多運行なき年ぞ

心太コロナの話尽きぬほど

神奈川

宮岡 弘

*塹壕は城の語部草茂る
築地のみ残せる御堂夏の草
一瞬の糸の張り見せ鮎釣らる
船寄せぬ遠流の島や卯浪寄す
薫風や湖見霽かすカフェテラス

*土管より覗く青空つくしんぼ

千葉

角口 秀子

長旅の荷物片づけおぼるめく
牡丹の崩るる辺り音絶ゆる
リハビリの父の歩幅や夏燕
大利根の左右に分かつ青田かな
肩上げの大きな針目豆の花

しりとり途切れてなんぢやもんぢやかな

関 妙子

*万緑や比肩の友の書の力
彫像の槍高々と緑さす
著莪咲くや男結びの四つ目垣

水門に音のふくらむ太宰の忌

福岡

小倉 征子

卵の花のさざ波寄する昼餼どき
濃紺の台紙に切絵夏兆す
山繭の肌かがやく峠口
*麴室淡く灯れる緑雨かな



沖 公式ホームページ開設

沖俳句会

検索



沖俳句会公式ホームページを開設いたしました。

最新号のダイジェスト、句会や行事の情報、新刊のお知らせ、
ブログ『航海日誌』には『主宰通信』など様々な情報を
発信してまいります。ぜひご覧ください。

<https://www.oki-haiku.com/>



スマートフォンからはこちらのQRコードを読み取るとアクセスできます